

# 藤枝静男『田紳有楽』<sup>1</sup>

## —〈イカモノ汎神論〉の地平—

塩 田 勉

Fujieda Shizuo, *DenshinYuraku*  
— The Horizon of Impostor's Mystic Vision —

SHIODA Tsutomu

### Abstract

Fujieda Shizuo wrote a novel dealing with his private life with realistic description since he looked up Shiga Naoya and Takii Kosaku as his teachers and followed their autobiographical, realist method.

However, suddenly there entered into Fujieda's postwar novels absurd narrative dimensions which created strange stylistic mixtures between the fact and fiction. All the characters and occurrences now had lost their solid ontological grounds and had become mere "signifiants" without archetypes or identities to return to.

Earlier critical literature has given some reasons for Fujieda's stylistic transformation where fiction and fact merged. They argued almost without exception that Fujieda adopted this method to examine his own self from still more profound layers of consciousness.

This article attempts to clarify not subjective reasons, rather tries to discover a certain socio-historico factor which caused his stylistic transformation, and found that Renunciation of Divinity of Emperor Showa, declared in 1946, was a decisive moment that made Fujieda introduce an absurd dimension into his till then realistic realm.

*Denshin Yuraku*, as a result, created a strange world where everything is nothing but a copy and there is no original. This originated initially from a Buddhist vision based on mysticism, but strangely enough, the world of the novel (written in 1974) turned out to be very close to the postmodern situation defined by Baudrillard's *Simulacrum and Simulation* of 1981. Therefore, *Denshin Yuraku* might well be seen as having anticipated the world to come after the collapse of the Japanese "Bubble".

### 1 はじめに

藤枝静男は、1908年（明41）、静岡県藤枝市生まれ、成蹊学園、旧制第八高等学校、千葉医科大学卒、藤枝で眼科医開業、平野謙、本多秋五らと交流、志賀直哉、瀧井孝作らに師事して私小説を書く。1942年（昭17）平塚市第二海軍火薬廠海軍共済組合病院眼科部長、結核を病む妻の看病と創作に励む。戦後、非現実的な次元とリアリティな世界が混交する作品を著す。1968年の『空気頭』や1974年の『田紳有楽』がその典型である。

なぜ「リアリズム描法」に「幻想綺譚」を接ぐ筆法を編み出したのか。本論では、『田紳有楽』を取り上げ、歴史・社会的文脈に、その手がかりを見出してみたい。

### 2 現実に割り込む幻想領域

ユーカリの花は九月すえ十月はじめ秋の入り口に咲く。枝という枝の先きに、葉と同色の小人のトンガリ帽みたいな固い蕾が群がりつき、やがて淡黄に変わり、そして帽子の部分がすっぽり抜け落ちると、ちょうど鞘をはずした筆の穂先のように圧迫され縮んでいた白色の雄蕊と、中心に突出する淡緑の雌蕊とが、露出し翻転して花卉の如くいっせいに開くのである。やがて雄蕊は羸弱し、綿毛となって間断なく高い梢から地上に舞い、徐々に腐蝕され乾いて、結局は黒胡麻のようになって散るのである。

『田紳有楽』244

冒頭、ユーカリ花の形状や開花が、しんみりした視線で捉えられ、筆と目がひとつになった簡明直截な描写が現れる。すると、事実在即した静謐な行間に、突如、荒唐無稽な語りが入り込んでくるのだ。話者の肉声が、出し抜けるに、志野筒形グイ呑みの声に変わる(249)。生物から死物への話者の転換は、「読者の度肝を抜く」(川村, 141)。しかし、小説のルール破りはまだ終わらない。グイ呑みは、最初の話者である骨董商磯礫億山によって、池の底に沈められている。マガイモノの骨董に、まやかしの古さをまとわせるためである。このグイ呑みが金魚のC子と恋をして交わる。グイ呑みが金魚とどうやって交わるんだか、といふか読者におかまいなく、作者は、生身の金魚と焼き物のぬれ場(池の中だからぬれてるに決まってるが)を描き出す。

彼女は……頭の角で私を突ついて揺さぶったり転がしたりした。そして何度もあの滑らかな腹部としなやかな尾で私の胴を締めつけ締めつけしているうちに、突然それが性の衝動に変わって、驚いたことには数回も続け様に噴卵して絶頂にたっしたのであった。……私のガランドオの胴腹のなかに全身を没入させ、私の内壁にぬらつく卵塊を擦りつけ擦りつけて竜巻き様の回転運動をくりかえして狂いまわったのである。……私はそれに伴って……かつて経験したことのない快感に酔いしれて意識のうすれを自覚したのであった。

255-256

へー、と読者は思うであろう。私的生活世界を写實的に描くという私小説の筆法が、『田紳有楽』では、まっこうから破られ、幻想奇譚が、写實的世界に割り込んでくる。その上、この場面では男女の性機能が逆転している点でも、奇妙な効果をもたらしている。

語り手も、最初は、骨董屋の磯礫億山だった。人間だと思っていると、慈氏弥勒菩薩の化身(244-249, 291-308, 314-347)なんだという。常識的写實性はすでに破綻している。中継ぎの話者として登場するのも、「志野筒形グイ呑み」(249-257)、朝鮮生まれの抹茶茶碗「柿の蒂」(257-266)、「丹波焼き井鉢」(266-291, 308-314)であって死物ばかりである。丹波焼き井鉢は、持ち主だった偽ラマ僧のスパイ、サイケン・ハクこと山村量三がもたらした怪しげな骨董だ。

弥勒の化身の骨董商の他に、地蔵、大黒、妙見菩薩など、浄土界のキャラクターも加わって、物語は、虚実の

けじめの定かならぬ、浮世離れた登場者によるにぎやかな大団円の裡に終わる。

化物や菩薩たちは、「飛行の術」(270)や「水脈遊泳」(299)を使って、天を翔け、地に潜り、境界をやすやすと越えるから、話の舞台も、インドやチベットへすいすい飛ぶ。日本の土俗の習慣やチベット仏教の超自然的領域にためらいなく踏み込み、チベット語や漢語のお経や御詠歌や民俗楽器の通奏低音と、登場するキャラクターが溶け合う。読者も文化や地理の境界が溶け去る世界に誘い込まれずにはいられない。

荒唐無稽のキャラクターだが、空想世界の観念的存在に留まっではない。大蛇が化けた阿闍梨は、妙に所帯染みたグチをこぼしたりして、幻想領域は実生活と混交し、虚実の境界は曖昧になる。

「このごろじゃあ、この辺の百姓も余り餅米はつくらんとみえて、毎年のこわ飯の分量が減るばかりだ。やっぱり政府の方針で休耕田がふえたせいかな」 262

などと、弥勒菩薩や地蔵が、不景気なお供え物を嘆いたり、骨董屋の弥勒菩薩が、訪ねてきた妙見菩薩に「冷蔵庫から焼豚の薄切りを出し、ビールを添えて酌をした」(337)り、両菩薩とも「老人性搔痒症」(293)に悩まされ、あられもない場面を演じたりするから、市井に棲む我々と区別がつかなくなる。

……耐らず金玉のさがりの左右を思わず下からこきあげるともう我慢も圧さえも効かなくなって、結局は遊離した玉の皮の両側をきつく掴んで引っぱり伸ばしたのち、両掌にはさんで渋紙を揉むような具合に力一杯揉みしだきながら部屋じゅうを鶴のように脚をあげて歩きまわるのである。こうすれば同一表面の柔い皮同志がこすれ合うだけだから損傷は残さぬのである。

292

弥勒菩薩は幻想次元の存在だが、言動は所帯染み世俗的である。弥勒は、「飛行の術」で遠隔地に飛べるが、くたびれると新幹線で帰ってくるし、「松食虫」(304)の被害や「ブラックホール」(342)の発見が気懸かりだったりする。地蔵は「農薬のおかげで蚊も蠅もたからなくなったから」「払子」もいらなくなって「どこかへなくしてしまった」(324)などという。こんなスットンキョウな菩薩や地蔵は聞いたことがない。何か、歴史・社会

的理由があるのだろうか。とりあえず、先達たちの学説をさらってみよう。

### 3 先行論文

1974年、桶谷秀昭<sup>2</sup>は、伝記的分析手法を用いながら、「藤枝氏ほど自分の気質に苦しんできた作家はすくない」(394)と述べ、『硝酸銀』や『空気頭』を例に挙げながら、「リアリズムの描法を破っている」ように見える作品も、己れの気質に正面から取り組みたかった結果である、と述べた。桶谷が「欣求浄土」について「氏が年齢に強いられてそれに直面した経験、あの異様な経験を背景にした絶対感情」(398)と述べた部分は、『田紳有楽』にも当てはまる。

1978年、川村二郎<sup>3</sup>は、「私小説の一筋につながることを、信仰告白のようにくり返し公言している」藤枝静男が、「奇抜でもって読者の度肝を抜く」(141)、「幻想綺譚風な図柄が私小説的な情景の中に」「平然と、無遠慮に……割り込んできて」「階段を踏み外したような感覚に襲われかねない」(142)と述べた。そうなった理由は、「『私』とは何か。その捉えがたさを……律儀に野暮に追求しようとする……過程において、幻想綺譚風な要素が、必然的な追求手段として選びとられた」(147-148)から、と主張、「表面からだけでは確認できない『私』を、裏面から、……存在の無意識の根底から、うかがい取ろうと」(149)、「安定を放棄し、未知の『私』の深みを探っている」(150)、と評価した。

1990年、川西政明<sup>4</sup>は、「『皇国思想でも共産主義革命でもいいが、それを信じ、それに全身を奪われたところで、現象そのものが変われば心は醒めざるを得ない。敗戦体験と云い安保体験と云う。それに挫折したからといって、見栄か外聞のように何時までもご大層に担ぎまわっているのは見苦しい」(「木と虫と山」という言葉を引き、「この考えが藤枝静男の髄液である。彼の文学は、彼の生涯で遭遇した出来事を肉体精神運動の総和としてあますところなく表現しつくすところに成立した」(263-264)、『田紳有楽』は「『私』の世界を捏造・変造・贋造し、これを語る自由を得」(282)、「『楽しさを誘う』世界を創造する」(279)ことに成功した(284)、と位置づけた。

1992年、浅見公一<sup>5</sup>は、藤枝の作品群は、「『藤枝的発語』としか言いようのない言語群の圧倒的な力で批評対象となることから身をもぎ放し、……批評的言辞自身が

……その脆弱を思い知らされる」(163)、「藤枝的発語」という「エクリチュールの生成」においては、「全ての是と非、真と偽、実と虚、可と不可が……審問され、『秩序』の絶対性は更新され続ける」(165-166)、とデリダ流の論法で捉え難さを特徴づけた。

1993年、四方田犬彦<sup>6</sup>は、『田紳有楽』が「万物が偽物である、という壮大な哲学」(53)に貫かれ、登場人物の「自己同一性が確定しない」(59)。「ひとたび言述された事柄が次の文脈ではいとも簡単に覆され、……一切が虚言の相のもとに排されると同時に肯定されるという奇怪なシステム」(61)が作品にはある、と指摘した。『欣求浄土』や『空気頭』から始まるこの「語り口の非連続的な逸脱」(64)が『田紳有楽』では徹底化され、「物質主義者として人体と物質の変容の過程を観察し、剥離と解体をもって喜びの象徴と見な」(68)されるに至った、と解釈した。子宮願望の果てに、物質への回帰願望、「死の本能」を見出した晩年のフロイトにかようところがある。

1994年、同郷の親友小川国夫<sup>7</sup>は、藤枝に関する伝記的事実(年譜や写真を含む)を記録し、「〈田紳有楽〉は、いわば〈風狂〉の手法に拠って、……作家のその肉界を吐露しようとしている。〈田紳有楽〉の四文字のうちの、〈田〉がキーワードなのに違いない。そこが舞台だ……、舞台は時空・霊肉の融合体で、それをそのまま、藤枝静男の自然と称んでも差しつかえないような場だ」(67)、と述べ、「骨董の世界もまた自己探索の場」(157)、その場とは、セザンヌのように「カンヴァスに現れるのは、もうあるがままの空間」ではなく、「こしらえる意識は少しもな」く、「考えてやってることじゃな」く、「眼がやってしまう」、ような小説作法の結果である、と指摘した(149)。

1999年、宮内淳子<sup>8</sup>は、リアリスティックな私小説的空間と、綺譚的空間が、藤枝のいう「エーケル[ドイツ語で吐き気]」を土壌としながら、「昇華されない繰り返し」(14)をする。「この不定形なものが定形なものに飲み込まれないよう、藤枝は観念的なものへの依存を警戒し、情緒的な、流通する物語に流されることを退けた」(15)、「理不尽で説明しがたい感情を、……抵抗なく世間に受けとめられる」ためには、「過剰な感情を水で薄めなければならない。それは……不真面目になることなのであった。彼の倫理観はそういうふうに通く」(15-16)と見た。「母型」に「還元されることを拒み、それ自体のリアリティで見られるものをひきつけた造形」(140)は、

「李朝民画」さながら、「造形は、ゆがんで平衡を失っており、……一種異様な現実感」を創造する「コラージュ」となる（以上133-135）、と指摘した。

さらに宮内は、登場人物はすべて「実体に行き着かない名前」にすぎず「浮遊している」（137）、「権威づけ、意味づけを保証してくれるものを持たず」（139）、生と死、真贋などの二項対立は「すべて無功にされている」（153）、とポストモダンの枠組みで『田紳有楽』の手法を解釈した。

1999年、森下竜生<sup>9</sup>は、私小説的な「『私』の相対化」「私小説的な話法構造の中でいかに『私』の多層性を実現しうるか」（2）が『田紳有楽』の課題だった、とし、「コラージュ手法」、「朝鮮民画」への藤枝の言及に注目しながら、全登場人物の真実性を相対化して、「虚構性の中に自我を解き放つ」筋道を発見したと見た。

「複数の『一人称』による語りによって発語の肉體性と直接性を保持」「複数の声の相互否定性によって物語の展開のダイナミズムを獲得」「叙述においてグロテスクなまでの卑俗さ……によって……生々しさを耐えず喚起」（5）すると、特徴付けた。あらゆる権威や拠り所が相対化される大団円は、「『私小説』の羈絆を振りほどき、未踏の位置に」至った、と見る。この終章にジョイスの『フィニガンズ・ウエイク』に共通する世界を見いだした英文学者藤井かよの「夢の世界なのではないかとも思われるふしもある」（10）という言葉で森下は論を締めくくった。

2002年、宮内淳子<sup>9</sup>は、前掲、宮内論文における「コラージュ手法」や「朝鮮民画」の影響を指摘した部分を敷衍した。『田紳有楽』の「世界は〈自然に〉藤枝の目に映ったのではない。……さまざまな方法を用い、見なくてはならない世界として作り出したもの」「軸をブラセ、境界を狂わせて藤枝が見ようとした『私』なるもの」「見ようと願わないかぎり、ぜったいに見えない」（55）世界だ、と説いた。

先行学説が到達した認識は、次のようにまとめられるであろう。「リアリズムの描法」と「幻想奇譚」の結び付き「李朝民画」や「コラージュ」さながらの文体は、私小説家藤枝静男が、見たくない「私」の深層に筆をとどかせるために、あえて選択した筆法である。そこに現れるのは、「複数の声の相互否定性」によって、価値を支える権威が消され、すべての拠り所が相対化される世界である。藤枝は、そういう世界を描くために、「私」が依拠してきた価値の総点検を行なった。

先行論文の多くは、写実と虚構の結び付きの原因を、藤枝の、より深い「私」探究という内的動機に見出している。自覚したくない文化的偏見や醜悪さが潜む識閥下の世界を、可視化するには、幻想的次元と現実的次元の接合が必要で、それが技法上、「李朝民画」や「コラージュ」的手法となって現れた、そこに展開するのは、絶対的実在という拠り所を喪って、全ての表象が浮遊しはじめるポストモダンの状況である、先行学説が到達したのはこんなところであろうか。

しかし、何が、藤枝をして、従来の描法を転換させ、「私」の深層に迫らせたのか、その外的要因は何か、という点については、必ずしも究明されてこず、先行論文には、こうした角度からの切り込みは皆無に近かった。

ただし、川西政明が、藤枝の「木と虫と山」から、「『皇国思想でも共産主義革命でもいいが、それを信じ、それに全身を奪われたところで、現象そのものが変われば心は醒めざるを得ない。敗戦体験と云い安保体験と云う。それに挫折したからといって、見栄か外聞のように何時までもご大層に担ぎまわっているのは見苦しい』という部分を引き「この考えが藤枝静男の髄液である」、と述べたとき、本論の論点に近付いたと言える。しかし、川西は、引用に含蓄された歴史・社会的次元に立ち入ろうとはしなかった。

本論は、先行論文の到達点に学びながら、歴史・社会的文脈に作品を浸してみることによって、「リリズム描法」に「幻想綺譚」を接ぐ筆法の由来を明らかにすることを目的としている。

#### 4 イカモノ世界の汎化

『田紳有楽』に頻出するのは、「偽」（250, 261, 268, 290）、「イカモノ」（250, 261, 266, 285）、「まやかし」（252）、「偽物」（260）、「贋物、ニセモノ」（268, 270, 335）、「インチキ」（281, 289, 326, 328）、「嘘」（289, 328, 333）といった、〈いかがわしさ〉〈うさんくささ〉を表わす評辞である。骨董屋が舞台だから、真贋、偽物、イカモノといった言葉が反復されても不思議はない。しかし、藤枝は、これらに「どっちつかず」（327）、「曖昧模糊」（291）、「中途半端」（249）など、境界やけじめをぼかす機能も付加している。真贋鑑定もさることながら、どちらとも判断できない宙ぶらりんの状態、換言すれば、ある種の不可知論が、偽物を表わす言葉にまわりついている。それには何かわけがあるであろうか。

真贋判定は微妙な問題である。藤枝は判定に失敗した経験談を「横好き」<sup>11</sup>で披露しているが、藤枝は、その経験を通じて、次のような認識に達した。

そこで、それならどうするかというと、私は不徹底な話だが、今ではそんなことはいちいち考えないことにしている。元はどうあろうが、今自分の見ているものは、今自分の前に置かれた姿で見るしかないのだから、それが現在美しければ、美しいと感ずる他はない、というはなはだ当たりまえの結論に到達しているのである。 342

つまり、外在的な真贋よりも、内在的な印象を重視して、それがよって来たる対象自体の真贋の判断は宙吊りにする、という、「不徹底な」不可知論的スタンスを採ったのである。

『田紳有楽』に登場する「志野」、「柿の蒂」、「丹波」などの焼き物は、いずれも偽物である。骨董屋の主人は、焼き物の〈貫入〉(249)から泥や水垢が沁み入って風合いを帯びるまで、十年でも二十年でも池の底に沈めておく。しかし、藤枝は、そうしたマガイモノに、愛情に満ちた視線を注ぎ、最終的には、全登場人物の差異を無化してしまう。

偽の焼き物たちは、妖術を学び、人間に変身したり、「飛行の術」や「水脈遊泳」の技を駆使して、骨董屋の主人とおしゃべりをしたり、地下水脈を移動して、遠隔地に赴く。「柿の蒂」は、「水脈遊泳」の術により、地底に棲む大蛇の姿をした阿闍梨から人間変身の術を授けられる。この阿闍梨は、敗戦の前年に乞食に殺された。今は、その乞食が偽阿闍梨になり澄ましている(「大蛇は実は偽物」,「院敷尊者 [=阿闍梨] 自体が偽物」, 262)。偽の焼き物「柿の蒂」も偽阿闍梨を殺して次代偽阿闍梨になろうとスキを伺っている。その院敷尊者から「柿の蒂」は、「滓見白」の名を与えられるが、「滓見」は、「サイケン」とも「カスミ」とも読める。藤枝静男の本名は「勝見」だから、明らかに作者の分身でもある、という仕立てになっている。

他方、天皇の密命を受け、ラマ僧に化け、チベットへ潜入したスパイ山村三量が携えていた平凡な茶碗は、チベットのバターや家畜の糞や鳥葬の死体から飛び散った肉片や油脂が染み込んで垢じみていたから、主人が「丹波」としたのである。

「私は……イカモノであることは主人の判定どおりで

ある」(266),「私の旧主サイケン・ラマは内蒙古生まれの偽坊主」(277),「人間は万事色と慾, 思いこみと騙しあい, 転生も永世も嘘のつきっこ以外の何ものでもない」(289), そう丹波はためらいなく語る。この偽丹波を日本にもたらした偽ラマ僧, サイケン・ラマことスパイの山村三量もこう述懐する。

「ラマだと申し上げましたが、これ真赤な偽りで、実は天皇陛下の命を受け青海チベットの地形政情をさぐる目的をもって潜入した日本国密偵なのであります……。」 285

『田紳有楽』では、焼き物が変身した人間も、生身の人間も、例外なく、インチキ、イカモノ、偽物である。それだけではない。弥勒菩薩の化身である磯礫億山も「敗戦このかた骨董屋をやって身の始末をつけている」(334),「モグリ骨董屋」(291)で、陰囊をポリポリ掻き始めるとやめられなくなり,「ススルータ医学大医典」(314)で治療法を調べてみるものの、薬の原料が入手できず、本の匂いを嗅いで我慢するという、気の毒なほど胡散くさい菩薩であり、地蔵も「私らはどっちつかずだからね」(327)と自嘲する有り様だ。一事が万事こういった手合だから、ものごとの権威や拠り所や典拠に遡及して、存在や本質のかっちりした岩盤に突き当たることなど、金輪際、期待できない。万象はコピーのコピー、どこまで行っても母型や原型に行き着くことのない、合わせ鏡のような世界が広がるばかり。ボードリヤールの『シミュラクルとシミュレーション』<sup>12</sup>さながら、果てしないポストモダンの状況が現出する。

## 5 万象は複製, 万人は同根

他方,『田紳有楽』に通奏低音として流れているのは、チベット仏教の御詠歌や経文、音楽である。

山川草木悉皆成仏 (257, 265)

万物流転生滅同根 (265)

万物雁物不増不減 (281)

経文を踏まえて、「柿の蒂」は「人間にも、木にも草にも、土にも水にも、万有に変身する方法」を体得して、「輪廻の相を一身に体現して、万有すべてが偽物であるということを証明してみせたい」(263), と抱負を述べ

る。つまり、輪廻転生が真理なら、原型は存在せず、生きとし生けるものは、循環する仏性のコピーとなる。ただし、成仏すれば輪廻から解脱でき、仏性こそ万象の原型と考えられるのかもしれないが、問題は、仏性の顕現であるはずの弥勒も、後述するように、ブラックホールの発見（342）によって五十六億七千万年後に約束された説法（262）も怪しくなり、今や絶対的な権威の拠り所も消滅した状況が『田紳有楽』の世界である。

逆に、「山川草木悉皆成仏」なら、万象は仏性のコピーで同根となる。こうした汎神論が、遠国チベットの仏教的教理を領しているうちはよいが、これが、歴史・社会の現実的文脈と結び付くとどうなるか。

## 6 イカモノの正体

スパイの山村三量は、「人間万事……思いこみと騙しあい……嘘のつきっこ」（289）と述べ、次のように語る。

「私は風の便りに日本国が戦争に負け天皇がイカモノの正体を現したときいて、それをこの両眼で確かめるためにこれからどうともして故国に帰着こうと決心してチベットを出てまいったのでございます……」  
285

山村は、軍命を受け、8年間チベットに潜入して情報収集にあたり、帰国後、『秘境西域八年の潜行』<sup>13</sup>を著わした西川一三がモデルである。

情報将校が天皇の命を終戦後も忠実に遂行しつづけた例を、我々は小野田寛郎少尉の名とともに記憶している。小野田少尉が、戦後29年たってフィリピン、ルバン島から帰還したのは1974年3月、奇しくも『田紳有楽』が上梓された年（1月）だった。1972年ごろ残留兵がルバン島警察軍と銃撃戦を交えたと報道されたから、藤枝もこのニュースには接していたであろう。小野田少尉は、元直属の上司であった谷口義美元少佐から任務解除の命を受けた後、初めて帰国した。二年前にも横井床一元伍長がグアム島で発見され帰還している。<sup>13</sup>

こうした化石化した天皇への忠誠が亡霊のごとく現れると、戦前、多くの日本人が天皇制軍国主義に隷従していた過去が思い起こされずにはいない。当時、大方の日本人は、1946年元旦に出された「新日本建設に関する詔書」（「天皇人間宣言」）<sup>15</sup>に衝撃を受け、価値の混乱に陥

らずにはいられなかったはずである。

山村三量が「天皇がイカモノの正体を現した」と述べた件りは、敗戦直前、阿闍梨が殺され偽物とすり替わった話とともに、作品を解く重要なカギとなる。天皇が神ではなく人間だった、大本営発表のニュースも嘘だった、そう知らされた飢え死に寸前の日本人は、天皇制という装置が吹き込んできた忠誠という憑き物が一気に落ち、「万人が万人に対して狼となる」ホブズの状況下に投げ出された。その瞬間は、例えば、石川淳の「焼け跡のキリスト」<sup>16</sup>に鮮やかに描かれているが、藤枝も、その刹那を、豹変する山村の表情の中に捉えた。

彼は急にへらへらと卑しげな笑い声をあげた。それまでの山村三量の神妙な顔つきが一変していた。……天皇だ日本だチベットだお釈迦さんだと、本当を云えば口から出まかせ。国へ帰ったら……ひと山あててやろうと、こうして旅を急いでいるというのが私の本心さ。  
285

このどんでん返しこそ、事実的世界に確信の根拠を置いた藤枝の小説技法を、大きく転換させた歴史・社会的要因だったのではないかと筆者は考える。『田紳有楽』の「今度の戦争責任で修羅道に落ちた天照大神」（128）などという捉え方も同じ思いから発せられたに違いない。そういう見方を裏づける資料はほかにもある。

## 7 「志賀直哉・天皇・中野重治」

その資料とは、1946（昭和21）年当時、藤枝が崇拝する志賀直哉と共産党員となった中野重治が、天皇をめぐる意見を交した「志賀直哉・天皇・中野重治」<sup>17</sup>である。天皇制をめぐる中野と志賀のやりとりを藤枝が覚え書き風に書いたもので、両者の書簡や記事、それらの要約、コメントから成り立っている。1908（明治41）年生まれの藤枝は、志賀直哉を小説の神様として崇拝する。藤枝は、そういうタテ社会的モラルと、知識人としてのリベラルな平等主義的人間観とに分裂していた。その分裂は、上流階級出身の志賀直哉への尊敬と、左翼系の友人たち（平野謙など）に対する劣等感という形で随所に現れた。

藤枝は自然科学を信じる医師でもあったから、天皇を単純に神だと信じるほど非科学ではなかったろう。しかし、志賀のように、無意識のうちに、天皇を日本文化の

拠り所とする心情も合わせ持っており、齒に衣着せずに天皇を批判できた共産党員中野重治に対する、志賀の反撥を共有してもいた。

実は、「天皇がイカモノの正体を現した」という山村の言葉も「志賀直哉・天皇・中野重治」に、昭和21年2月23日の「アカハタ」の「道徳と天皇」という記事からとられたものである。藤枝によると、「アカハタ」は、「あらゆるニセモノも天皇ほどのズウズウしさをみせたものは一人もない。天皇はニセがねつくりの王である」<sup>18</sup>（「昭和21.1.29.「アカハタ」『実地と空想』要約」, 354）と主張した。

同記録から、中野重治と志賀の天皇観に触れる箇所を拾ってみよう。中野は、こう書いている。

明治天皇は二万二千町歩の土地を持っていたが、その後国の土地九十万八千二十五町歩を盗み、更に二百万町歩を盗んだ。その後そのうちの六十三万町歩を残してあとを売った。別に百一万五百八十八町歩を自分用ときめた。…… 353

さらに中野は、昭和21年3月10、12日に「東京新聞」に次のように書いた。

国民は飢えていて天皇とその一家とは食いふとっている。国民は日々死人を出す交通地獄のなかにおいて、天皇は常習無賃乗車である。国民のつとめ人と学生とは食堂から食堂へかけずりまわっていて、天皇は外食券なしで食いあるいている。戦死者と寡婦とは国に充ちていて天皇はまだ法廷に引き出されていない。 341

中野に対して、志賀は次のように天皇を擁護した。

今度の戦争で天子様に責任があるとは思はれない。然し天皇制には責任があると思ふ。……

天子様と国民との古い関係をこの際捨て去つて了ふ事は淋しい。今度の憲法が国民のさういふ色々な不安を一掃してくれるのだと一番嬉しい事である。

「昭和21.4.『婦人公論』第三〇卷第一 再生号  
掲載『天皇制』」, 340-341

志賀は、さらに、次のように中野に書き送る。

天使様が太つている — むられるといふ文章を見た時不愉快でした。君が正直に書いてあるのか或る成心で書いてあるのかききたいと思ひます。何か復しう心のやうなものも感じられ兎に角甚だ不純な印象を受けました 344

志賀は、中野の『暗夜行路』批判に対しても、

あの文章を読んで私は自分の小説に就いて書かれてゐると思ふよりも中野君の「人」といふか「性質」といふか、その方ばかりが感ぜられました。…… 351

と反撥した。中野の『暗夜行路』批判については後で述べるが、それは、「暗夜行路雑談」で、時任謙作の、ブルジョワ的な、金銭感覚の欠如、下級者の人権に対する徹底した鈍感さなどが、労働者から見ると腹立たしい見ものであることを、中野が暴いた記事だった。

藤枝は、中野が文学者としての志賀を尊敬していることを指摘した上で（352）、志賀寄りの感想を述べた。

……中野文が煽動的であり、早口であり、前のめりであり、浮き腰でもあったことは、今読んでも誰にもわかるのである。

いったいに、人に反対する場合、中野氏には、文体的に云って、こと穏やかに論をすすめないという傾向がある。相手の胸に突き刺さるような具合にもって行かないと気がすまないと云ったところがある。云わずともいいようなことまで書く。ある場合には、そういう刺激的挑撥的な云い廻しをしないと相手に通じないだろうというような、相手を信用しないと云った気配すらある。 356

他方、志賀に対しては、「中野氏のような骨身にこたえた長年月の被害者の反抗的迫力はなく、思考の保守性、非論理性、直感性は覆うべくもないが、しかし『三年会』『同心会』と続く精いっぱい努力はあるのである」、（356）と弁護した。では、「三年会」「同心会」とは何だったのか。志賀は、そこでどのような役割を果たしたか。

## 8 「三年会」と「同心会」

藤枝によれば、「敗戦必至の昭和十九年の暮あたりから、敗戦後の国内混乱防止のために当時の小磯内閣の外

務大臣重光葵の発意による懇談会」が「三年会」で、志賀は「ほとんど毎回出席していた」という。「参加者はほかに安倍能成、田中耕太郎、武者小路実篤、山本有三、和辻哲郎、谷川徹三などであった」。「この会合は、戦後には……『同心会』となり、大内兵衛、石橋湛山、鈴木大拙、広津和郎、里見弴、柳宗悦、梅原龍三郎らを加えて岩波書店から雑誌『世界』を発行し、志賀氏は創作欄企画を担当し」た(342-343)、という。

つまり、志賀は、中産階級的価値を代表する知識人として、天皇制はともかく、軍国主義に対する批判を共有する隠れ反ファシスト懇談会の常連であった、と藤枝は擁護するのである。

当時マルクス主義者だった中野重治は、天皇制を封建遺制と捉え、払拭すべき遺物と見なしたから、天皇に対しても、容赦なく批判を加えることができた。しかし、「三年会・同心会」のメンバーの志賀は、徹底した天皇制批判にはいたらず、「天子様と国民との古い関係をこの際捨て去つて了ふ事は淋しい」といった「中途半端」な感情を残し、共産主義者のラディカルな封建制度批判に与みすことはなかった。

そうした立場に立つ文化人が歴史的に果たした役割は、1949年、中華人民共和国が成立して、翌年朝鮮戦争が起こったとき、アメリカが日本政府の内閣官房内閣調査室を使喚して、知識人・文化人を、反共宣伝の戦列に組み込み、世論操作に動員するためのリストを作成させた事実と照し合わせてみるとはっきりする。その機密書類は、後年、吉原公一郎が全文を暴露した。<sup>19</sup>同書によると、藤枝が三年会・同心会のメンバーとして名前を挙げた、志賀直哉、安倍能成、田中耕太郎、武者小路実篤、和辻哲郎、鈴木大拙らは「政府の内面協力により行なう民間広報細目」に、ことごとく含まれていた(吉原、118-120)。

この協力者リストには、長谷川如是閑、小泉信三、阿倍真之助、大宅壮一、笠信太郎、坂西志保、我妻栄、巖山政道、宮沢俊義、森戸辰男、中山伊知郎、赤尾好夫、賀川豊彦、S・カンドウ、辰野隆、村上元三、井伏鱒二、今日出海、小宮豊隆、中村光夫、尾崎史郎、伊藤整、高村光太郎、湯川秀樹、中谷宇吉郎、和達清夫、西谷啓治、高坂正顕、林健太郎、柳田國男、新関良三、桜田武、藤山愛一郎、一万田尚登、石坂泰三、稲葉秀三、難波田春夫、賀賀健三、杉靖三郎、高田保馬、徳川夢声、藤原義江、近藤日出造などの文化人が網羅されていた。

内閣調査室は、これらの文化人に反共主義的記事を執

筆させ、新聞、雑誌、ラジオを通じて宣伝する具体的戦略と予算を立てていた。「配布ルートの確立」(121)として「日販と東販との連携、鉄道弘済会の協力、農協、労組、組織との連携、日青協等青年組織との連携」、「裏スポンサー」として「ラジオ東京、文化放送、新日本放送、中部日本放送、九州放送、北海道放送」が挙げられ、「協力機関」としては「アメリカ大使館、国府系のCIA」に関わる諸組織が列挙されていた(122-123)。

「広報活動実施要領」(114)には「実施に当っては政府機関自ら行う広報については特に官製臭を無くするよう努め、又民間団体の自主的活動に協力する場合に於ても政府は極力表面に出ざるよう周到なる配慮を加え以て広報効果の挙ぐるよう努むること」などと、指示がゆきとどいている。

つまり藤枝が擁護した志賀は、政府やアメリカCIAなどに無意識のうちに奉仕させられた文化人の一人であり、志賀が、「今度の憲法が国民のさういふ色々な不安を一掃してくれるものだと一番嬉しい」、と述べた心情は、ぬかりなく拾い上げられ、戦後支配に利用された。マッカーサーは、象徴天皇制を憲法に組み込み、クエイカー教徒のヴァイニング夫人を皇太子に張り付けて新天皇を洗脳する戦略を採った。平和主義者で良心的なクエイカー教徒を教育係に選んだ読みは当たり、平成天皇は、常に新憲法に精神に拠って公式発言をするようになり、右翼が天皇を精神的拠り所することを極めて難しくした。<sup>20</sup>

志賀直哉に情的に密着していた藤枝は、戦後発表した反戦的小説<sup>21</sup>が示すように軍国主義者ではなかったし、盲目的な天皇制擁護論者でもなかったが、国民の多くがそうあったように、天皇を心の拠り所として無意識に信じる国民の一人だった、と言うことができるであろう。

## 9 終戦の原風景

ここで、藤枝や志賀のように天皇に心を寄せていた一市民として、筆者の祖父の例を引くことをお許しいただきたい。祖父は、鹽田弘といい明治天皇の近衛兵を勤めた。父親は朝鮮に駐留し留守であったから、東京の田舎だった杉並の父の実家で、祖父は、祖母、母と孫の筆者、疎開してきた三人の孫たちとその母親(娘)らを、終戦を迎えるまで保護し面倒を見た。

祖父は、典型的な家父長で、留守の父親に成り代わり、覚悟をもって孫たちをしつけた。口答えしたり、生

意気だったり、嘘をつく、容赦なく折檻した。空襲にそなえ広い庭に七つの防空壕を掘り、親戚が疎開させた二、三十もある行李を空襲警報のサイレンとともに、陣頭指揮に立って防空壕に投げ入れ、孫や妻や娘を避難させ、自分と嫁（母）は、最後に防空壕に入った。明治男子の見本のような人だった。

東京大空襲があり、周囲の家々もことごとく焼けた。初めて見た赤く染まった空と、音もなく夢のように飛行するB29の機影は幼心にも深く刻み込まれた。やがて、終戦となり、生活の中心だった防空壕は打ち捨てられ、台風で水浸しになってもかつての生活の中心は見向きもされなくなった。悪さもせず低空を飛ぶB29が日常の眺めとなり、空襲警報のサイレンが鳴らなくなった八月十五日を境に、それまで鬼畜だったアメリカ人は神様となり、畏敬されていた天皇や兵隊さんの権威は地に墜ちた。そのどんでん返しの際やかな瞬間は、六歳だった私の心にも消しがたい刻印を残さずにはおかなかった。

その時、祖父の態度も急変した。鬼のように怖かった祖父が借りてきた猫のようになり、人畜無害の只の爺一人に変わってしまったのである。玉音放送の日、雑音のひどいラジオからもれるキンキン声に耳を傾けながら、しおたれ、おし黙っていた祖父の姿は、子供心にも異様な光景と映り敗戦の原風景となった。おそらく、多くの大人たちの心を、同じような価値の瓦壊が襲ったに違いない。戦前と戦後にまたがる価値の逆転に直面した大人たちは、しばらく不可知論に陥ったことであろう。私の祖父もそうで、あの玉音放送以来、何も云わなくなった。戦後に生まれた孫が、どんな不埒を働こうと、祖父は、もう叱かろうとはしなかった。私を折檻した自信と威厳は祖父から永遠に消え去った。祖父は、1971年に没した。

無数の帰還兵たちが、むごい戦争体験について口を閉ざしたままのもの、おそらくは、祖父と同じ衝撃を心に受けたせいではなからうか。そして『田紳有楽』で、天皇もイカモノの正体を現した日に、藤枝が体験した眩暈のような衝撃も、祖父と同じ類のものではなかったか。そのショックの内実を、藤枝が、整理・客観化して語りえたのは、戦後、30年近くを経た74年だったのも、彼の自己省察の徹底度を思えば、不思議なことではない。<sup>22</sup>

## 10 「どっちつかず」で「不徹底」な地平

藤枝が、戦争直後の価値観の激変の中で、自分の天皇観や階級観を自己点検して、崇拜してきた志賀を相対化

した文章が「志賀直哉・天皇・中野重治」だった、と言ってもよい。すでに論じたのは天皇をめぐる前半であるが、後半は、志賀の『暗夜行路』における階級観をめぐって交わした、中野とのやりとりから成る。

藤枝は、目が見届け、耳が聞き取り、体が感得した事実に忠実であることが小説家の倫理だと信じていた。五感が感得した事柄は、真実かどうか験することができる。それ以上疑うことができないところまで再吟味が可能だ。確かな事実を言葉で再現する厳しさに私小説のリアリズムは依拠している、そう藤枝は信じていた。

しかし、敗戦による価値観のどんでん返しを体験した藤枝は、意識では看取できなかった、文化や階級に条件付けられた、隠れたものさしが「私」の裡に潜んでいることを、それが敗戦の衝撃を受けて初めて本人にも見えるようになったことを、中野が照らし出した志賀像を通して識ったのである。

中野重治の『暗夜行路』批判は、「暗夜行路雑談」にあり、次のような一節が志賀の反感を買った、と藤枝は見る。

「肩に腕があり、腕に手があり、手に具合よく指がついていて、飯食うにも鼻汁かむにも格別人がそれを意識せぬように、金はそこにあり、そこにあることに対して持ち主が純粋に意識を動かされぬ」ときめつけ、更に進んで「謙作はとに角、作者も一しょになって全くそれに触れていぬのは純粋な一種の鈍感ということになる」。

360

中野は、志賀に染みついた階級意識<sup>23</sup>の盲点を突いた。学習院出身の中産階級で、皇族とも交流のある白樺派の作家たちに共通する上流階級意識に潜在する偏見を、中野は暴いてみせたのである。同じ筆法で、中野は、こう指摘した。

私たちがはいつて行って志賀さんの奥さんが迎えて下さったが、そのとき奥さんが「何々していただきます」という言葉をつかって、私にはそれがこたえたことだった。(361)

藤枝は、志賀の批判を「天皇親近感と下級者蔑視」(368)と定義し、こう述べる。

さて「雑談」の『暗夜行路』批判のポイントが、特

権階級子弟の金銭的無反省への非難と怒りの他に三つあることは周知のことである。しかしそのひとつ「何々して頂きます」で代表される目したのものへの人格無視は、おそらく志賀氏自身にとっては全く身に覚えのない不当な云いがかりと受取られたに相違ない。むしろ単なる罵言として氏を怒らせただけであったと思われる。けれども、客観的事実としてこういう気味合いが所謂上流子弟に普遍的に存在し、志賀氏もそれから逃れられなかったことは確かであろう。362

藤枝は次のように分析する。白樺派の作家たちにおいては、「敗戦による天皇制廃止論のリアクションとして」「天皇存在の感覚」が、「『ここで気がついてみたら在った』」にすぎない。彼らは、「自我の拡張確立を至上命令とした」から「天皇存在の感覚はなかった」(368)。「彼等においては、対天皇感情と下級者蔑視根性とが密着癒合型でなくて分離型であった」(369)、のだと。

他方、藤枝は、『暗夜行路』の时任謙作の階級観に対する中野の批判を引きながらこう述べた。

「謙作の心の中央には人間のあいだの平等ということがあり、いわば謙作はそれを中心にして生きているといえる。しかし謙作は、実地には、宿屋とか、女中とか、車夫とか、按摩とかいういわば目下のもの、それから見ずしらずの人間、船の乗合い客、貸家の家主とかいったものにたいしては実に横柄で大東だ。父親にたいする時などと全然出方がちがう。……— 同じことは『頂きます』という言葉にも出ている — 彼の『頂きます』は反駁を許さない — 最も消極的な言葉での最大の身勝手の絶対肯定 — この気随息子の甘えの骨頂がそこにある」<sup>24</sup>

こういう人間に対する勃然たる怒りと憎悪は被圧迫労働者階級への献身者中野重治にとって年来のものであったろう。370

藤枝は、こう結論する。

中野重治には、金銭的自由・下級者への特権階級的横柄さ、そういう属性のまかり通る環境を己れに許して反省せぬ主人公謙作を、小説のなかにノサバラせて平気でいる作者に対する怒りがある。……しかし、誰にも明白なように、この属性あるがために謙作の主体的行動は可能となり『暗夜行路』のモチーフは力強

く生かされているのである。

376

藤枝は、中野にも志賀にも距離をおきながら、どちらにも己れを解消しない。謙作の特権階級的意識批判に理解を示しながらも、それがブルジョワジーに起因することから、ブルジョワジー特有の個人主義を可能にしてもいるという事実を見落とさない。中野も志賀も純粋で徹底しているけれども、藤枝は、「われわれはみな中途半端の出来」(14)、「真偽とり混ぜ曖昧模糊」(68)、「私らはどっちつかず」(115)と『田紳有楽』の登場人物に語らせたように、自分も「どっちつかず」で「不徹底」(「横好き」, 342)であり、「私」の深部には、天皇への親しみと同時に、下級者への蔑視を批判した中野の平等主義にも共感する部分がある、と自覚している。

文学は、人生的価値のバランスの裡に成り立つのであり、謙作の差別主義と主我主義は、表裏して志賀文学を支えている。これが、藤枝が敗戦ショックから立ち直って見出した均衡ではなかったかと思う。こうした地平に〈イカモノ汎神論〉が滲みわたっていく。

## 11 〈イカモノ汎神論〉とポストモダン

藤枝が、事實的記述と幻想的奇譚とを折り合わせたころ、オイルショックが到来し、十年後、バブルが起きた。万象がオリジナルのないコピーである、という輪廻転生から生まれたイカモノ汎神論は、奇妙なことにあらゆる物象が交換価値で量られて交換可能となる、現代資本主義の状況に酷似してくる。それは、ボードリヤールが『シミュラクルとシミュレーション』<sup>12</sup>で記述した状況と変わらない。

ボードリヤールによれば、現代は、「起源 (origine) も現実性 (réalité) もない実在 (réel) のモデルで形つくられた」「シミュレーション」(1) が支配する時代である。「事実、照合、客観的原因」は「もはや存在しない」(5)。「実は神なんかどこにも居ず、シミュラクルとしてしか存在」(6) しない。「もし神がアイコンだと露見したり、その神がシミュラクルになり下がったりしたら、神はどうなってしまふのだろうか」(5-6)、そうボードリヤールは提言する。

この認識は、「天皇がイカモノの正体を現した」後を描いた『田紳有楽』に通底する、と見て差し支えないであろう。そればかりではない、「山川草木悉皆成仏」(257, 265)、「万物流転生滅同根」(265)に基づく仏教

的汎神論は、ボードリヤールの次の言葉とピッタリ重なるのではないか。

シミュレーションは、……等価原則のユートピアに由来する、価値としての記号をラジカルに否定することに由来し、あらゆる照合の逆転と死を宣告するものとしての記号に由来するのだ。(8)

「山川草木悉皆成仏」「万物流転生滅同根」、仏教の理想も、まさに「等価原則のユートピア」である。すべてが平等・等価になれば、オリジナルとコピーの差異も消滅する。それは「シミュラクル（模造品、幻影）」が支配する現代世界に限りなく近づく。

ボードリヤールは、「ディズニランド」を例に挙げ、現代が「廃棄物を、夢を、幻影を、歴史的夢的幻想をいたるところで再利用しなければなら」ず、「こどもと大人の伝説とは廃棄物」(19)になった、と指摘した。

藤枝が描いたのも、実は天皇という神なんかどこにも居ない、神がシミュラクル、すなわち、イカモノであることが露見した後の世界だった。諸事万端が、還るべき祖型をもたず、実社会の岩盤に打ち込まれていた実在感と生命感の杭が抜け落ちて、相互に交換可能な符丁と化して浮遊する。そういう最終的権威や審級がどこにも求められなくなったポストモダンの状況を『田紳有楽』は先取りした、と言えなくもない。ボードリヤールの上掲書より7年早く『田紳有楽』は書かれているからである。

「シミュラクル」が資本主義生産と深く係わっていることは、ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』<sup>24</sup>が明らかにしたが、日本でそれが一般認識化するのには、「ヴァーチャル」な表象が一般化した80年代の終わりから90年代にかけてである。

詳しい論証は後日にゆずるが、天皇がイカモノの正体を露呈したとき、天皇を顕彰する国家的装飾装置も瓦壊し、既成価値がガラクタと化して廃虚が現れた。三島や石川が、ベンヤミンのいう〈アレゴリー状況〉を廃虚に見出した<sup>25</sup>とすれば、藤枝は、万象はシミュラクルだ、とする、いずれオウム真理教を生み出さずにはいなかった〈イカモノ汎神論〉の地平を垣間見たとは言えまいか。

フランスのポストモダン思想を、素早く輸入して、魂なきおしゃべりを繰り広げたフーコーやデリダかぶれの文化人とは異なり、藤枝はリアリスティックな筆致を追い詰め、その果てに幻想奇譚と事実が混交して虚実のけ

じめがつかなくなる世界を予見した。戦後体験に対する洞察によって磨き澄まされた藤枝の感受性に、日本経済に忍び込んでくる奇っ怪な市場原理が、それと気付かぬまま正確に刻印されていた、と考えてもいいのかも知れない。資本主義の最前線で感じ取ったことを、ヨーロッパで理論化したフランスの哲学者たちと根本的には違わない筋道をたどって、日本における価値の歴史的転瞬を、藤枝は、虚実混交する物語世界として形象化した、とはいえまいか。(2007.9.6.)

## 注

- 『田紳有楽』の引用は、『藤枝静男著作集』第六巻（講談社、1977.5.）による。以下、頁数のみ示す。
- 「巻末作家論＝藤枝静男絶対感情と『私』」『現代の文学 10 藤枝静男 秋元松代』（講談社、1974.2.）、392-398頁。
- 「解説」『田紳有楽』（講談社文庫、1978.11.）、141-150頁。
- 「解説 離れて、しかも強く即く」『田紳有楽・空気頭』（講談社文芸文庫、1990.6.）、269-285頁。
- 『「田紳有楽」から／まで』『日本文学 歴史・文学・宗教・文明』（名著刊行会、1992.12.）、163-166頁。
- 「藤枝静男における物質的恍惚」『文学的記憶』（五柳書院、1993.8.）、53-68頁。
- 『藤枝静男と私』（小沢書店、1994.2.）、1-187頁。
- 『藤枝静男論 タンタルスの小説』（〔有〕エディトリアルデザイン研究所、1999.1.）、1-192頁。
- 「藤枝静男『田紳有楽』論」『兵庫教育大学近代文芸雑誌』第10号（兵庫教育大学、1999.2.）、1-11頁。
- 「遠近法の壊し方——藤枝静男の場合——」『日本文学』51号（日本文学協会 2002.11.）、46-56頁。なお、「李朝民画」の空間の歪め方には、セザンヌを思わせる遠近法の破壊があり、一枚の絵の中に、俯角、仰角、俯瞰などが共存する不思議な効果をもち、藤枝が影響を認めているそうした効果は、伊丹潤編『李朝民画』（講談社、1975.11.）で確認できる。
- 『藤枝静男著作集』第二巻（講談社、1976.9.）、333-357頁。
- 竹原あき子訳（法政大学出版局、1984.3.原書は1981出版）、とくに一章の「シミュラクルの先行」（1-56頁）は示唆的である。
- 全三巻（芙蓉書房 1977.5.）。
- 『20世紀年表』（毎日新聞社、1997.9.）、751頁。
- 塩田庄兵衛他編『戦後史資集』（新日本出版社、1984.2.）、核心は次の部分にある。「朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯ハ、始終相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、単ナル神話ト伝説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本国民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニモ非ズ」（223）。
- 『石川淳全集』第二巻（筑摩書房、1989.6.）、467-482頁。なお塩田 勉「石川淳『焼け跡のイエス』——〈アレゴリー〉として読む——」（『世界文学』No.105,2007.7.、1-8頁）参照。
- 「風報」（1957.2.）。
- 「志賀直哉・天皇・中野重治」、初出『文藝』1975.5.、『藤枝静男著作集』第一巻 講談社所収）、338-381頁。
- 吉原公一郎編『「週刊文春」と内閣調査室：御用ジャーナリ

ズムの体質と背景』(晩聲社, 1977.12.)。

<sup>20</sup> 日本文学者, 千種・スティーヴン氏から, 2007年7月に伺った話に基づく。スティーヴン氏は, 三島由紀夫研究の過程で, そうした事実を発見されたと語っておられた。

<sup>21</sup> 例えば, 「イペリット眼」, 「犬の血」, 「武井衛生二等兵の証言」『藤枝静男著作集』第四卷(講談社, 1977.1.)。

<sup>22</sup> なお, 詳細は以下を参照。塩田 勉「手前勝手と滅私奉公の間——自伝的回想による『私のスタンス』」『言語と文学』講義録——文学的直観のプラクティス』(國文社, 2003.3.), 134-147頁。

<sup>23</sup> 塩田 勉「『小僧の神様』——隠蔽の美学としての文体」『文学の深層と地平』(國文社, 1991.11.), 176-201頁, 参照。

<sup>24</sup> 例えば, マルクスの資本論を読んでいた梶井基次郎は, 「の

んきな患者」(『梶井基次郎全集』第一卷, 筑摩書房, 1966.4.)で, 結核患者の吉田にこう語らせている。「吉田が病院に来て以来最もしみじみた印象をうけてみたものはこの附添婦といふ寂しい女達の群のことであつて, それらの人達はみな單なる生活の必要といふだけではなしに, 夫に死別れたとか年が寄って養ひ手がないとか, どこかにそうした人生の不幸を烙印されてゐる人達であることを吉田は観察してみたのである……」(265)。白樺派の目下のものに対する感覚とは異なる。

<sup>25</sup> 『ヴァルター・ベンヤミン著作集2』(1936年刊。晶文社, 1970.8.), 7-59頁。

<sup>26</sup> 『ドイツ悲劇の根源』(1928年刊。川村二郎・三城満禧訳 法政大学出版局 1975.4.) 参照。